

# 図書館所蔵資料電子化の現状と今後の課題

— 古典籍総合データベースを中心に —

## 1 概況

2005年4月の古典籍DB化プロジェクト室設置から3年を経、当初の予定である5年計画の半ばを過ぎた。作業対象となる資料も、館蔵古典籍の主な部分を終え、内容の充実がはかられてきた。利用状況を見ても、多くの方に利用されているとは思いますが、まだ改善の余地はあろう。本年度は、例年通りの報告に加え、図書館所蔵資料の電子化の課題、展望を述べることとしたい。

## 2 作業内容

2007年度は、日本史関係の資料を中心にすえ作業を進めた。作業対象となったのは、図書館の配架分類で言うとり(歴史)、ヌ(伝記)、イ(総類)、それに古文書の一大コレクションである「荻野研究室収集文書」(文庫12)と関連する古文書、拓本類、及び田中光顕寄贈の「維新志士遺墨」などを主たるものとした。

例年あらたに公開するポータルサイトは「資料でたどる日本の歴史」とし、「古文書50選」、「維新志士遺墨」をWEB展覧会形式で見られるようにし、ほかに各項目に館蔵資料の画像をリンクさせた「日本史年表」

を公開した。重要文化財4件を含む古文書群は圧巻であり、古代から近代初頭にいたるまで各時代を通観した年表からも館蔵資料の充実ぶりがうかがえる内容となっている。

こうした成果を受け、2008年3月～5月には「館蔵資料でたどる日本の歴史」と題し、データベースで公開中の古文書を中心とした展覧会を開催、多くの来場者に恵まれた。また、文部科学省が紹介している「大学図書館の特色ある取組」の一つとしてもとりあげられ、今後さらなる利用が期待される。ただ、2008年度以降については、これまでのような作業内容、体制を根本から見直す必要に迫られることとなった。

## 3 2008年度の予定

例年通り2007年秋に申請していた科学研究費補助金だが、今年は採択されなかった。本事業と同様の継続事業が他にも不採択となっている状況を考えると、本事業の意義が認められなかったというより、全体としてこうした大掛かりな事業への交付が難しくなったと考えるしかあるまい。本年度は作業規模としては当初の予定通り進めるが、しかしその後の展開については再考を迫られたとってよいだろう。主たる館蔵資料の公開は、おそらく2008年度の作業で完了するだろうが、次年度以降、現在のプロジェクトという枠組みのまま作業を続けることは難しいかもしれない。これを一つのきっかけとして、将来に向けた方針をしっかりと見据えておく必要がある。これまで進めてきた古典籍データベースのあり方の問題点を抽出するとともに、今後利用者に求められている姿を考えつつ、新しいあり方を考えてみたい。

## 4 現状における課題と展望

第一に、DBそのものの認知度をあげる工夫が必要であろう。当館が所蔵する古典籍(古書・貴重書)については、さまざまな媒体を通じてひろく一般に公開してきた。個々のコレクションの全容を伝える「文庫目録」、主要資料の画像を写真版で提供する「影印叢書」、さらには「図書館紀要」誌上での資料紹介といった印刷媒体はもとより、図書館主催による展覧会を学内外で開催したり、他機関による展示への資料提供も毎年多数おこなってきた。また、出版物、テレビ番組等への資料提供も年々その数を増やしてきた。

古典籍DB公開後は、そうした学外への提供も大幅に増加し、全体で2007年度は291件に達し、展覧会

古典籍総合データベース公開記念展示

# 館蔵資料でたどる日本の歴史

2008年 3/21 (金) → 5/8 (木) (日曜・祝日閉館)

【会場】 早稲田大学総合学術情報センター2階展示室  
【時間】 10:00～18:00 【主催】 早稲田大学図書館

貸出だけでも30件に及んだ。特にそのうちの画像の提供については、古典籍DBからのダウンロードによって提供したものが96件あり、前年度が22件だったのに比べ、飛躍的な伸びを示しているといっていだろう。従来なら現物の閲覧、資料撮影といった手続きが必要だったものが、そうした手順を踏むことなく、簡単な書類のやり取りだけで使っていただける点では、利用者にとっても、資料を保存する立場からいっても、有意義な変化だといえよう。特別資料室にいるとそうした変化は日々実感できるのだが、実際に図書館を利用している人々にとって、古典籍DBがどのように使われているのか、使いやすさはどうか、といった点について、どこまでフォローできているだろうか。

また、学内外への広報活動についても再考が必要であろう。これまでは、展示や新サイト公開時の案内も、プレスリリースなどによって周知をはかっていたが、それほど積極的ではなかったかもしれない。他機関でも古典籍のDB化はさまざまな形で進められており、その中で本DBについて広く一般に知らうためには、より積極的な広報活動が必要である。

従来の古典籍DBの作業は、いわば「データの蓄積」がおもな仕事になっていた。30万件とされる古典籍を網羅的に書誌作成、画像撮影するという考えのもと、遮二無二進んできたといえなくもない。結果として、書誌作成はほぼ予定通り、画像撮影もカット数としては予定数をこなしてきた。それによる効果は前述のとおりである。こうした書誌情報、さらには原本代替資料としての古典籍DBの役割は今後も増加してゆくことだろう。ただ、データの蓄積に重点を置くと、どうしても公開するまでの作業に力が注がれ、公開後のフォローが足りなかったのかもしれない。公開しました、あとは自由に使ってください、だけではDBを提供する側として、本来の責任を果たしたことはないであろう。やはり、利用者の声に耳を傾け、よりよい情報提供を心がける必要がある。そのためには、あらたなデータの蓄積はもとより、既存のデータをいかに有効に活用するか、考えなくてはならない。

## 5 既存情報の有効活用

具体的に考えてみよう。古典籍DBのデータといったとき、それは画像ばかりではなく、書誌、さらには作業中に蓄積されてきたさまざまな情報をも含んでいるわけで、それらを有効利用する必要がある。たとえば、書誌情報のなかに蔵書印についての注記がある。蔵書印は、その有無、内容によって、資料の成立の背景や、伝来の過程を知ることができる書誌学上貴重な情報の一つである。ただ、単純に名前を押すような印は少なく、多くが雅号や堂号などを用い、さらに篆書と言う独特の書体を用いている。そのため、一見しただけではわかりにくいことも多く、これまでも印文や所用者についての辞書類が数多く刊行されている。本DBではそうした辞書類を参考としつつも、多くの資料を比較検討することでその誤りをただし、あらたな情報を付加してきた。こうしたツールを単なる事務用ツールとして埋もれさせてしまうのは惜しいものがある。これをネット上で公開し、かつ、印文や所用者で古典籍DB内を検索できるようにすることで、資料の伝来や研究の歴史を考える上での貴重な情報を提示できるのではないかと。

また本DB、というより早稲田大学図書館の特色のひとつに、有名な資料、稀覯本だけでなく、古文書学、あるいは書誌学的に広い分野の資料を所蔵している点がある。これをいかし、たとえば歴史研究に必要な資料について、具体例に基づきながら紹介するといった、いわばバーチャル史料論のような情報提供の仕方も考えられよう。そうすることで、大量の書誌・画像情報だけでなく、より教育的効果の高い情報を提供できるのではないだろうか。現在、古典籍DBは主としてWINEとのリンクの上に、周辺諸情報、たとえば翻刻資料や研究文献などにつながっている。今後はより具体的な要望にこたえるためにも、こうした付加価値のある情報を提供する必要があるだろう。

その中には既存の紙媒体での情報や、独自に作成した情報を書誌・画像にリンクさせるという方法もあるかもしれない。そのテストケースとして、2008年6月からは「曲亭馬琴書簡集」(1968年、図書館編刊)と原本画像とをリンクさせる試みを始める。翻刻情報そのものは図書館の別環境に収納し、それと古典籍DBをリンクさせることでより効果的な情報提供がなされることとなった。今後、古文書などにこの方法を敷衍し、一層の利用の便をはかってゆきたい。こうして図書館側から積極的に古典籍DBの利用方法を提示することで、学内外の教員、研究者による授業等への利用を一層喚起できるのではないだろうか。





## 6 教育・研究支援の手段として

現在、古典籍DBは原則として、授業や講演用のレジュメといった教育目的での一時的な利用の場合は自由にダウンロードしてよいこととしているため、情報を発信している側に、その具体的な利用方法やDBについての要望が伝わってこない点も問題となっている。あるいはDBを通じてそうした質問、要望を受け付けられるような仕組みも必要であろうし、また、図書館発信の情報提供、特に図書館固有の情報の提供ということを考えてとき、前述のような具体的な利用方法を提示することも必要であろう。一方では現在、学内ではインターネットによる授業を支援する体制が整いつつある。こうした仕組みの中で、本DBの画像、書誌情報等を活用することも可能だろうし、本DBの中にそうした授業（講義）形式の画面を作りこむことができれば、特定の主題についての調査・研究についてより専門性の高い、それでいて親しみやすい情報を提供できるのではないだろうか。そうした画面作成にあたっては、それぞれを図書館が主体となって作ることもできようが、利用者自らが古典籍DBの中で作れるような雛形を用意し、利用してもらおう方法も考えられる。学内外の研究者、教育関係者が自らの研究テーマに即して古典籍DBを活用し、それを広く一般に公開することで、学習研究に役立つDBを構築するという本来の目的の一つをより積極的に実践できるのではないだろうか。

そのためには図書館側の地盤作りが重要になってくる。図書館が主体的に古典籍についての情報を発信しようとしたとき、さらには研究者の作業への協力を考えても、それなりの経験と資料知識を備えた図書館員の存在が求められる。120年以上の歴史の上に立った図書館の蔵書構成を理解し、目的にあった資料を選定するためには単に専門知識を持った人材であれば事足

りるということにはなるまい。そうした館員育成も今後の課題となってこよう。

ところで古典籍DBの今後については、こうした将来像も重要だが、同時に内容の充実もはかっていく必要がある。これまですすめてきた作業の継続だけでなく、どういった資料をデータベースに取り込んでゆくか、対象範囲の再検討も必要であろう。

## 7 新たなデータの蓄積と今後の展開

本プロジェクトは5年計画で開始され、いまだその道半ばである。ただ、プロジェクトとして設定された期間を終えたときに古典籍DBそのものの役割が終わるわけではない。むしろその逆である。プロジェクト自体はあくまで遡及入力であり、古典籍についての情報提供のあり方に道をつけるためのものである。これまで述べてきたように、ある程度のデータが蓄積された今だからこそ、新たな利用方法を考えなくてはならない。加えて、当然あらたな情報の追加も必要なのである。いつまでも素材の更新されないDBでは意味がない。本来収載すべき資料で取り込まれていないものはもとより、新規に受け入れた資料があれば当然DBに入れるべきであろう。「○○という貴重な資料が早稲田にはいった」との情報を各種媒体、たとえば「ふみくら」や「図書館紀要」で紹介してもその情報がWINEや古典籍DBにいつまでたっても入力されなければ、利用者は満足しないだろう。そうならないためにも、プロジェクト終了後も、恒常的な業務の中で、確実にデータの蓄積を続けてゆく必要がある。新収資料はもちろんのこと、今回のプロジェクトで主たる対象としなかった部分についても今後逐次データを追加してゆくことになる。

具体的には、すでに一部についてはその公開を始めているが、明治期を中心とした近代日本の文献資料、すなわち図書、書簡、自筆資料などがある。2006年度に公開した大隈重信関係資料、さらに2007年度の維新志士遺墨などもそうした資料の一部であり、その流れで2008年に入ってからあらたに公開したポータルサイトが「近代日本と早稲田」である。これは「文学関係資料を中心として」と副題を付したように、近代日本の文学作品（図書・自筆資料とも）のうち、著作権保護期間を過ぎたものの全文をDB上で公開するものである。まずは本間久雄文庫や今井卓爾文庫などの近代文学コレクションを主たる対象とし、加えて通常非公開の稲門ライブラリーの中から10人程度の作品を公開しはじめている。今後、さらにデータを追加する予定であり、これが近代文学研究に資するところ

は大きいであろう。

その他に中央図書館では開館以来、明治期図書コーナーを設け、閲覧を制限することで資料の保護につとめてきたが、これらは日本の近代化を直接証言してくれる貴重な資料群である。すでにほとんどが書誌データはWINEに入力されているが、新たに画像データを追加作成することで、研究者や一般の人々に多くの情報を提供することになると同時に、原本の保護といった視点でも有効ではないだろうか。書誌データの管理面からの問題もあろうが、積極的に考えてゆきたい。

また、洋書についても同様である。早稲田の貴重書というと主たる部分は和漢書である。ただ、洋書にも貴重な資料が多く含まれていることも周知の事実であろう。これら洋書の貴重書の画像情報が提供できれば、それは早稲田の新しい試みとして、注目されるだろう。そうなれば、もはや古典籍総合データベースとはいえないかもしれない。和漢書のイメージが強い古典

籍という言葉から一歩進み、貴重資料総合データベースということになろう。あらゆる国、時代、分野にまたがる貴重資料を可能な限り網羅的に書誌・画像データベース化し、さまざまな利用形態に対応する仕組みができれば、それはすでにデータベースの枠を超えた「早稲田大学電子図書館」とでもいうような新しい図書館を開館するに等しい。

さらに欲を言えば、そうした資料を持つ図書館同士の連携も将来的な視野に置いておきたい。古典籍DB開始当初からの目的である早稲田の収蔵資料にとどまらない他機関との連携を、書誌情報・画像情報の面で深められれば、原本の閲覧には制限があっても、DB上での閲覧や利用のハードルはかなり低く設定できるのではないだろうか。何年先になるかわからないが、そうした電子図書館の開館と、貴重書の相互利用を目指し、新たな気持ちで古典籍DBの構築を進めてゆきたい。

今年はその第一歩を踏み出す年である。

